歴史地理学 175 22～29 1995.9

「マット」と「ケット」後日譚

千 葉 徳 爾

I．本論の目的
II．喜田論文の概要
III．喜田論文の影響
IV．著者の見解とその論拠
V．結　　論

I．本論の目的

故喜田貞吉博士は，はじめ京都，のち東北帝大教授として，いわゆる正統国史学派の立場にありながら，はやくから古代史研究に考古学，民俗学などの資料をとりいれ，学際的研究を志した。著者もまた後学として大いにその点に敬意を表するとともに，今もその学恩を受けつつある。しかしながら，博士の得られた成果の中にも，必ずしもすべて当っているとばかりは申せない場合がある。最近，著者は偶々ある研究の途上で，博士の論文を利用する機会があり，その一部に誤りを発見し得たので，それを報告するとともに，併せて何故にそれが誤ったかを論じ，歴史地理学研究上の着眼と誤認とを考える上で，自戒すべき問題点を述べてみたい。これがこのノートの目的である。なお，以下学術論文の体裁にならって敬語を省く。

II．喜田論文の概要

喜田の研究では，特に日本民族の古代における発達，形成の過程にかかわるテーマが多かった。ことにその，蝦夷と称せられた人びとが，日本民族の形成上どのように位置づけられるかを問題とし，それとアイヌ族とのかかわりに注目している。そして，アイヌ族の人びとが多くは毛深い体質である故に，これを毛人と記載することが，中国並びに日本の古史に見えることを挙げ，その蝦夷と称された東日本の住民の一部が，いわゆる毛人と混住した日本民族であり，その子孫としてアイヌ族的風貌をもつ東日本の住民が成立し，山間僻地に久しい後代まで残存居住したと推論した。そしてその状況証拠として喜田は津軽地方の沿岸部に近世の中ごろまで，アイヌ族の居住が記録されていることを多くの論文に指摘している（喜田，1981—82）。

このような見解は，初期の柳田国男などにもみられ，山男・山女という伝承的存在が，いわゆる先住民の山間に残存するものと解釈された（柳田，1917）。これは，いわば明治末から大正初期にかけての，古代日本の住民についての，かなり一般的な学界の傾向を示すもののようにも受けとられる（柳田，1925）。喜田はその還暦間近い1931年に「歴史地理」誌上の巻頭論文として，本論文に誌すような「マットとケット」の題名で，その毛人と記された住民の一部が越後魚沼郡の山間，かの秋山郷の一部に比較的近い時代まで，残存したのではないかと，地名及び民俗を証拠として述べた。以下にはその一般論的な部分を略して，要点のみを記載してみよう（喜田，1931）。

「新潟県中魚沼郡の山間に，土俗ケット或はケットゥと呼ばれる部落がある。又それに対して別に

マットと呼ばれる村民があって，ケットの者は其のマットの者を目してマット狢（むじな）と称し，人を騙すものとして恐れて居たといふのである。今去る9月に長野県下水内郡桑名川へ行った時の聞書を先づここに断片的に紹介して見る。」

喜田はこのような書き出しでその見聞を提示した。桑名川は記したように長野県ではあるが，問題の集落である中魚沼郡の西端に近いケットゥ(現津南町)とは約20kmしか離れていない上に，狭い峡谷の一本の道筋であるから，その人的，物的交流によって情報は容易に得られた。

秋山郷は鈴木牧之の旅行記以来世に知られた土地で(鈴木，1828)，現代でもなお秘境とか平氏の落人といったイメージで語られる。おそらく古くは信越両国の境界地帯として，所属も明確ではなかったであろう。

「越後あたりでは秋山の者と云へば直ちに山の者の代表的名辞となり，今では土地の者も秋山者と言はれる事を甚しく忌み嫌ふ風があるといふ（中略)。所謂ケットは其の秋山谷の代表的なもので，彼等は自ら平家の落人と称し，他と交通縁組を忌み，近い頃まで普通教育も実施されず，他村人が訪問しても確かな紹介が無ければ面会もせず，時としては戸を閉して隠れてしまふ程だったといふ（中略)。嘗ては粟・稗・玉蜀黍の類を常食とし，橡の実を貯へるといふ風で，熊・猿・零羊を獲って里へ売りに出て，米を買って帰る位が，里との交通のおもなものであったといふ。」

「ここばかりは嘗て天然痘もはいった事がない。近ごろ種痘を強行しようと思うても，どうしても応じないので，殊更に痘瘡面の医師を選んで，体験談からやっと納得させたといふ事実もあるさうな。なほケットの人の風采について，嘗て親しく此の地を踏査した医師の某君は，身体長大，色白く，眼は青味を帯び，毛多く，頬骨が秀でて，居ると語った。」

ケットに対するマットについても，種々の事が語られている。マットの人は他人を騙すというのである。

「それはひとりケットの人が言ふばかりでなく，他の里人でもそれを口にして，自分に此の事を話してくれた某君は，今年60近い方と見受けたが，其幼少の時にマットの人が来ると，化かされぬ様に眉に唾を付けたものであったといふ。」

以上が喜田自身の見聞である。以下はその資料を基礎とする論考で，まず，ケット或いはケットゥと呼ばれる集落の位置と地形が陸測5万分の1地形図によって考察され，それが苗場山方面から北流して千曲川に注ぐ中津川上流渓谷を占める秋成村字穴藤（ケットゥ)並びに同じ谷の約3km上流の字結東(ケットゥ）であることを述べ，両者は共に同一系統の住民〔湧井姓が多い＝著者注〕をもつ。しかし集落の位置を異にするので，文字としては書きわけたのであろうと推定した。そして両地の住民がケットと呼ばれるのは，文字の毛人を音読したのであろうという話者某の見解に賛同し，古代の越の蝦夷と呼ばれた北陸地方の住民に多毛の人が一般的であった結果として，古史に毛人と記載されたことを引いて裏づけ，秋山郷の山間にはその血統をひく者が近世まで残存居住したことを語るものであろうと推測する。ここまでは，地形と文字及び史料などによって状況証拠とみたわけである。

つぎに，それに対してマットと呼ばれたのは，当時の町村名としてこの谷筋への入口に当る小千谷の南，約10kmに真人村大字真人があり，現代はさらにそれらが小区域に分れて丘陵や谷底を占めているところがそれであるとした。このあたりまでは本来の大和民族としての住民が存在し，より奥地の旧蝦夷であるケットに対し，マットすなわち真の日本人と称したのであろうと考えた。その根拠は古代の八姓の最上位に当る真人姓が，その拡大呼称として大和民族一般を指すようになり，毛人に対する本来の日本人の意味をもって，マットと称することとなったであろうと，語義を拡張推論した。加えてケットす

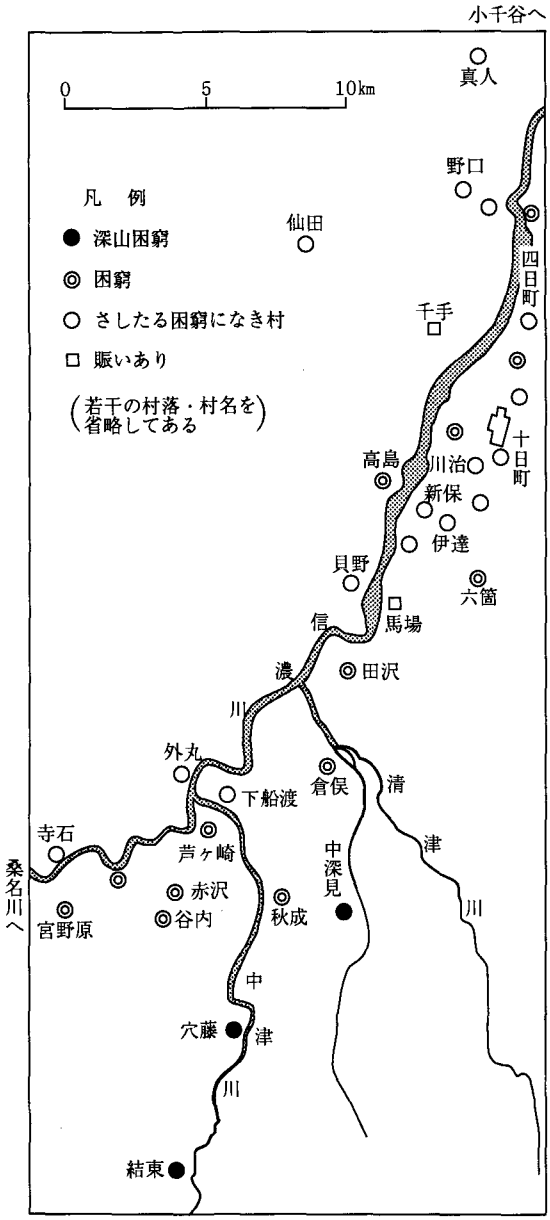

図1　18世紀中期の中魚沼郡諸村
(「魚沼郡村々様子大概書〔宝暦5年〕より作図)

なわち山間住民にくらべ知識の勝るマットの平地人の中には，ケットをだます事柄を行う場合が少からずあって，明治初年の北海道アイヌが来住する和人によってだまされることが多かったように，マットは人をだますこと狢のようだとケットの人には思われて，マットは狢だとあだなするようになり，遂に諺として久しく伝えられるようになったのではなかろうかと，喜田は嘗てアイヌ族の指導保護事業にたずさわったバチェラーから耳にしたことを想起し，さらに類推を重ねて解釈したのである。

因みに，この地方で狢（むじな）と呼ぶのは多く日本在来の獣であり，人をだますと信じられたタヌキを指す名である。すなわち，マットにくらべケットは知識の乏しい未開の住民であって，明治初年の北海道で原住民アイヌと新来の和人との間にみられた相互の対立意識が，嘗てこの越後の熟蝦夷といわれた原住民と新来の大和民族との間にも存在したことを語る民俗の残存と喜田は分析したわけである。極めて一般的な意味で「古語は僻地に残りやすい」という本居宣長以来の見解（本居，1801）が，喜田にもあったと認めて差支えあるまい。

III. 喜田論文の影響

この論文は越後地方の郷土史家，民俗研究者ならびに歴史家などに，広く知られ一定の影響を与えたとみられる。たとえば「高志路」という新潟県にひろく知られる郷土研究誌の編集者で知名の郷土研究家，小林存が昭和29年に出版した『中魚沼の物語』には，このマットとケットについて，正否いずれとも決せられぬと記している(小林，1956)。喜田自身は「隨筆日録」の中で，その後に越後高田に旅行した時に，魚沼地方の人である小学教員小松芳春に調査を依頼していた。その人が昭和7年，すなわち前記「マットとケット」を発表したつぎの年に小松芳春のケットの実地調査について報告を受け，自分も実地の調査を行いたいと記している（喜田，1932)。その報告内容は記されていないけれども，前記小林存は小松が当時下船渡村小学校の教頭であり，喜田の見解を支持したと記している(小林，1956)。喜田は昭和10年に『斎東史話』を出版したが（喜田，1935)，その中でもこの論文の概要を再論し，バチェラーの話を述べて，文明の高い者が低い住民に対してとる形はどこでもそのような疑いをかけられると，

夷族平定過程でのエピソードとしてマット狢の語をとらえている(喜田，1935)。昭和14年に喜田は胃癌で逝去したから，おそらく一生この考えを変えなかったであろう。

実情として第二次世界大戦後は，この種の人種・民族について現実の住民の出自を明らかにすることは，一種の差別につながると考えられ，極めて敬遠されるテーマの一つとなった。また，既にそれらを記憶し口外する古老も大半は他界してしまい，実地調査の手がかりも極めて乏しく，研究者が現在以上に問題の真実に迫ることは，かえって現地では困難になっているとみてよかろう。著者もこれを試みようとして果さない理由はここにある。いうまでもなく，この研究が発表された「歴史地理」誌上にも，喜田の論文に対しては賛否両論共に現われていない。当時の国史学界の風潮は，このような奇抜ともいえる異説について正面から論ずる者はほとんど無いし，文献史料はもちろん存在するわけでもない。他方で民俗的資料も多くの学者が無視していたから，このような結果となるのは止むを得ないことであった。つまりこの論文は大方の研究者にとって，無視という形で扱われたとみられる。しかしながら〈無視〉は否定ではない。解答困難ないわゆる難問も，またしばしばこのように取扱われる。それは学問の進歩・展開にとっては決して望ましいことではないのだ。

IV. 著者の見解とその論拠

結論から述べるなら，著者はこの論文を不完全な資料に基づいて，誤った結果に至った論文であると断定してはばからぬ。第一にそれは，後述する史料のあることを知らなかったことによる。しかしながら，同時にそのような過去の事実が存在したことを知らぬ住民たちにとっては，意外に大きな誤認を生み，しかも地域の人びとばかりか，広く地域外の学者をも誤解に導くほどに拡大されて伝わったといえる。この点は，主として聞きとりに頼る場合に，研究者として戒心を強化させるべき好い事例を提供したものであり，この点については極めて有益な論文となったといって差支えあるまい。以下それらをやや詳細に述べてみよう。

この論文を一読してまず指摘できる点は，「マット狢」という重要な鍵となる言葉の意味のとりちがえである。この語は喜田および彼にこれを語った某が子供のとき聞いて理解したような，マットすなわち新来の大和人が，知識を利用して純朴な山民をだますこと狢の如くだとも解せられる。しかしながら，喜田も承知していたように，この郡の北部には当時も現在も，真人という地名がある。その地名と狢との関係があるのか否か，地名について関心の深い喜田が，ここでほとんどそれをさしおいて直ちに『新撰姓氏録』によって，八姓の第一に挙げられた真人姓との関係に立入っているのは，やはり正統派国史学者としての素養が，むしろ災いとなって捉われた姿と言ったら過言であろうか。喜田は論文の中で「ケットの者はその〔地名としての〕マットの者を目して〕と限定的な表現を述べながら，直ちにマット即ち八姓の真人姓が大和国家の臣民全部に拡大して使用されるようになったとして論じているところに，知識過多の弊が認められると考えられる。

実は「マットとケット」の論文が発表される13年前，すなわち1919（大正８）年12月に，十日町の中央印刷社が『中魚沼郡誌』を発行した。当時郡制廃止に伴って記念として各地で編集出版された郡誌の１つであり，1973（昭和48）年に再び覆刻版が出されたから，比較的容易に各地の図書館で閲覧できる。この郡誌の編集は郡の教育会であるから，学校関係者ならば初版発行以前既に周知の文献と申してもよい(中魚沼郡教育会，1919)。その中に真人村の狢伝説について，つぎのような記載があるので，全文を引用する。

「真人村字若栃の南山といふ処に一の大なる横穴あり。其の深さ幾許なるを知らず。伝へ云ふ。古来此の穴に多くの狢棲息し，田畑を荒し農作を害すること鮮からず。其魁に一老狢あり。幾百の星

霜を経て魔力を有し往々里人を誑惑す。称して真人狢といふ。而して其魔術中，火事と葬儀とを以て最とす。闇黒なる深夜に方り遽然警鐘に昏夢破る。蹴起し出て之を見れば炎々方に盛にして天爲に焦げんとす。裝して之に赴けば其処を知らず。又深夜郊外を行くに際し，俄に鈴太鼓，鐃鈸等に混じて読経の声聞ゆ。漸にして近づけば数多の男女棺の前後を擁し導師之を導いて至る。怖れて絶叫すれば忽然消滅して余影を止めず。此の如きこと屢々なり。里人恐怖して夜行く能はず。天保の末其の撲滅を官に乞ふ。当時本村は松平肥後守の預所なりしを以て，肥後守即ち命を小千谷陣屋に下して退治せしむ。同陣屋の吏員数多の人夫を具して至り，旗幟を翻し鉞戟を立て鼓螺を奏し，且つ上田大槌山の猟夫銃に巧なるもの三人を召し，以て必遂を期せり。遠近老若之を觀るもの堵の如し。而して遂に得る所なかりき。爾来巷説喧伝し，且つ十日町来迎寺の住僧某，関東巡錫の際之を附会し，怪談を捏造し，能弁を以て信者の喝采を博す。人口に膾炙する所以なり。而して今之を古老に叩くも一人として其誑惑に遭遇せしものあるを聞かず。」

この文章で，マット狢とは真人村にいたと考えられた古狢を意味することは明らかである。なお，真人狢の伝承の詳細は篠田朝隆が「高志路」に詳細な報告を寄せている(篠田，1989)。しかも狢が誑惑するというのは，住民自身の心理作用であったことが，腕ききの猟師3名が1頭の獲物もなかったこと，しかもそれ以後真人の村人にはだまされたという者が1人も現れないということで証明されている。火災と鐘太鼓を打鳴らす葬列とは，いずれも平穏静寂な村落生活では最も強烈な印象を与えるので，久しく幻覚，幻聴の因子となるものであったことは，全国的現象であったということは，古くは天狗倒し，木魂，新しくは鉄道の汽笛や燈火などの幻覚・幻聴と類を同じくする心理現象に属する。

またこのマット狢の話を説経，法話として脚色した十日町来迎寺の住職は，時宗の僧として関東では藤沢の清浄光寺その他に旅し，一方魚沼地方をも巡錫したから，この話は広く各地に伝えられ，千曲川の谷にも拡まったのである。桑名川やより上流の信州各地まで話が伝わる間に，本来の伝承とは幾分姿を変え意味も異って伝播したとしても不思議ではなかった。そもそも民間伝承とはそのような存在であり，歴史史料とは類を異にする性質のものである。

ところで，この真人村の事件を知らなかった責任は単にこの論文を記述した喜田に帰すべきであろうか。喜田がその聞書のみに依拠して慎重な史料捜索をせず論文化したのは，軽卒を免れないが，その依頼を受けて実地調査を担当した小松芳春は，地元学校の教員でありながら十数年前の教育会が編集した郡誌を検討することもしなかったのは，その責任にこたえたものとは言い難い。もっとも喜田がこの人に託したのはケットの実地調査(喜田，1932)であったから，マットにまで手をのばさずともよかったろう。著名な郷土史家小林存すらこの郡誌を知らなかったのだから，必ずしも小松のみを責めるわけにはゆくまいが，マットが『新撰姓氏録』に記される八姓であると共に，郡内に実在する村名〔旧村落のみならず新町村名としても＝著者註〕である以上は，こちらにも一応の注意を払うべきであろう。この点では喜田が古代史の権威であるという点に，一も二もなく盲従して，地元としての自己の見地を顧みる，もしくは自主的な立場を堅持するということを忘却したともいえよう。調査に赴くに当って携えるべきものは，仮設であって，先入観ではない。

第2の問題は喜田を含めて，マットに対するケットとして果してそれが毛人か否かの検討は，いま少し慎重であるべきではないかということである。古代の文献ことに中国のそれに「毛人国」とある文字が，実態としての日本の蝦夷を意味したか否かは，必ずしも簡単に決し得まい。『宋書』には倭王武が「東征毛人五十五国」と記したというが，これが直ちにいわゆる蝦夷とみてよいかは必ずしも決定的なもの

ではあるまい(高橋，1963)。遣唐使に伴われた蝦夷とみられる人物は，髭の長さ四尺で弓に巧みであったというが，それは個人としては多毛であったとしても，全住民がこの人物同様とは必ずしも認め得る証明にはならぬ。

したがって，もし彼等が唐代の中国人によって毛人と記されたとしても，これを和語でケヒトと訓じ，一般庶民までが彼等東国住民をケットと音便で呼びならわすまでに至ったかということになれば，単純早急に然りとは言えぬ。

一方で方言として津軽から秋田方面には，山中の仮小屋をケトと称する地がかなり広い。他方では木曽山脈から三河高原にかけても，ケトは峡谷あるいは山にはさまれた山道を指す。両者の中間に当る南会津から魚沼郡の東方でも，青森県や秋田県と同じくケトは山中の小屋を意味している（民俗学研究所，1950)。魚沼郡の西部山中である中津川峡谷にケト又はケットウという名の集落があるのも，山峡もしくはそこに設けられた仮小屋を意味する地名から出たと解釈して差支えない。現に鈴木牧之はその地の家屋が極めて粗末な掘立柱の家であることを観察している(鈴木，1971)。この点についても喜田の着眼はやや一方的ではなかったか。なまじいに毛人についての知識が豊かであり，しかも日本民族と蝦夷との関係を求めることが，強い要求として常に脳裏にあった結果，ほとんど意識せずに考察の方向を一方に偏せしめることになったのであろう。学徒たるもまた難いかなである。

「元禄郷帳」には高四石五斗九升余として結東村，同じく高五石三斗弐升余として穴藤村が記される。前者の枝村として上日出山，下日出山，大谷内，横根新田，高野山があり以上が上ケットウと呼ばれる。後者が下ケットウで，地域が広大なため２つに大別して上下を文字を変えて書きわけ，さらに枝村として新墾地があり，それらには慶長後の新田がいくつか含まれたらしい。ことに上ケットウの枝村は山と呼ばれたものが多く，山林を開いて焼畑的耕作をしたのが定着して枝村となったらしく思われる。その後の両村は結東の名で合計されているので，それと信濃川に沿う水田地帯の寺石との近世末までの耕地・戸数および人口の状況を比較して，第１表に示した。元禄以後の十日町より南の信越国境までの魚沼の谷の村々の，同時代の比較は宝暦五（1775）年のものが得られるので，第１図にこれを掲げてある（小千谷市史編集委員会，1972)。

耕地の増加は上下のケットウにおいて，いずれもかなり著しいが，石盛と田畑比率からみて地味は肥えておらず，千曲川沿いの集落が「さしたる困窮にもなき村」であるのに，上結東の村々は，比高300～400ｍ高いために収穫が乏しく「此村深山，困窮の所」であって，人口は屢々減少傾向を示している。寛政元(1789)年の村明細帳でみても，「男ハ薪・栃之実・楢之実・くず・ところ取申候　女ハ縮織リ出申候」と補食によって生計を立てていることが述べられている(津南町史編集委員会，1982)。したがって，天和検地以前はほとんど農耕では生活が成立たなかった。おそらく中世には山稼のみの仮小屋生活であったので，ケットの名はそうした村構えから起ったという可能性は，毛人から出たという呼称起源を考えるよりも大きいのではなかろうか。

何故ならば，もし古代の毛人国といわれた時代の呼称が，ケヒトという言葉でこの土地に残ったとすれば，その語は大化以来の大和国家の都人あるいは官人たちがまず使用し，それが遥かな距離と時間とを経過しつつこの辺地に到達し，在住民衆の日常用語化したと考えねばなるまい。確かに奈良・平安時代のすぐれた武人に毛野・毛人の名乗は稀ではなかったが，その意味は多毛の体質を指すのではなく，エミシやエビスが武勇すぐれた人であった故に，毛人の文字が使用されたに止まる。もしそれが下落して，真人が一般和人に拡張したように，毛の多い人びとに対する差別的な呼びかたになったとすれば，それはおそらく鎌倉期以後を考えねばなるまい。さらにそれが僻地とはいえ700年後の近世まで，引続いて住

表1　近世中期以後の結東・真人・寺石村況対比（各村明細帳其他による）

結東	畑高定金納	戸数	人口	男	女	牛馬	農間稼その他
天和3 (1682)	4石5斗9升						
元禄15 (1702)	46石7斗7升						枝村出来る
宝暦5 (1755)	37石7斗2升	55戸	565人	308人	257人	なし	男は薪・木器作り
寛政1 (1789)	109石9斗9升	105戸	380人	192人	188人	15	天明噴火並に凶作あり 男は薪売・補食採取， 女は縮織
弘化5 (1848)	同上	99戸	359人	188人	171人	2	天保凶作あり 男女稼上記に同じ
文久1 (1861)	同上	99戸	309人	123人	186人	3	女縮織
真人							
宝暦5 (1755)	1174石3升 (田68町) (畑86町)	333戸	1728人	964人	764人	51	漆・蠟・漁猟・薪・縮織
寺石							
元禄5 (1692)	185石7斗1升	34戸	329人	186人	143人	19	
延享3 (1746)	285石7斗1升	131戸	734人	405人	329人	8	蠟
宝暦5 (1755)	同上	143戸	715人	396人	319人	15	女は縮織・蠟
明和8 (1771)	441石3升	145戸	?	?	?	12	蠟・酒株1
寛政1 (1789)	同上	133戸	640人	318人	322人	24	蠟・縮織
文久1 (1861)	同上 金納	142戸	686人	354人	332人	28	女縮織

注）各村共に小農の独立はおくれ，特に結東に明らかである。また，近世後期の人口の停滞もしくは減少が認められる。

民の出自を示す呼び方として，この信濃・越後の交通路の近くにそのまま残っていたろうか。そうした言語上の検討がまず必要であろう。

V．結　論

研究者は常に自らの課題にかかわる片言隻句をも資料として検討吟味すべきである。その点で上記のような喜田の旅中あるいは閑話の断片をも，等閑に付すことなく考察の対象とする態度は，決して否定すべきでない。責は前記したようにむしろ郷土の資料に粗漫で，学界の権威と思う者の言葉に盲従する側にあった。

喜田のこの問題に関する誤りは，専ら伝聞資料を慎重な検討によって自らが求めている資料としてのみ充分な可能性をもち，その他の可能性は乏しいと確認しなかった点にある。実は喜田の研究姿勢の特質は，その日常の見聞で得た資料を得られた形態，状況のまま，速かに公開して学界共有のものとすることにあった。これは学徒として学ぶべきところで，本論文の場合はたまたまそれが裏目に出たといってよろしい。疑う読者はその「学窓日誌」「隨筆日録」を参照せられたい(喜田，1932)。自戒すべきは先入観を排し，選択肢としての仮説を複数立てておく心がまえをもつことである。

（千葉県立中央博物館客員研究員）

〔参 照 文 献〕

〔出版年は特に記載のないものは現代活字版の出版年とする〕

喜田貞吉（1931）：マットとケット，歴史地理58―5，日本歴史地理学会。

――――(1932)：隨筆日録，歴史地理61―6，同上

――――(1935)：『斎東史話』立命館出版。

――――(1981―1982)：『喜田貞吉著作集』平凡社。

小林　存（1956）：『中魚沼郡の物語』増補版，中央印刷。

民俗学研究所編（1930）：『綜合日本民俗語彙』第2巻，平凡社。

本居宣長（初刊1801）：『王勝間』上，岩波文庫版1934，岩波書店。

中魚沼郡教育会編（1919）：『中魚沼郡誌』復刻版1973，中央印刷。

篠田朝隆(1989)：真人狢の古文書の伝説，高志路291。

小千谷市史編集委員会編（1972）：『小千谷市史史料集』所収「魚沼郡村々様子大概書　宝暦五年」（初刊1755），小千谷市教育委員会。

高橋富雄（1963）：『蝦夷』吉川弘文館。

津南町史編集委員会編（1982）：『津南町史編集資料第14集』所収「近世村差出明細帳その2」同町史編集室。

鈴木牧之（初刊1828）：『秋山記行・夜職草』宮榮二校註 1971，平凡社。

柳田國男（初刊1917）：山人考，『山の人生』収載，定本柳田國男集第4巻 1963，筑摩書房。

――――(初刊1925)：『山の人生』アサヒグラフ，郷土研究社(初刊1926)，定本柳田国男集第4巻1963，筑摩書房。